

二〇二四年度 光塩女子学院中等科【第一回】

## 国語基礎入試問題

二〇二四年二月一日（木）実施

### 《注意事項》

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- ② 解答用紙に、受験番号（漢数字・算用数字どちらでも可）と氏名を書きなさい。
- ③ 解答は、解答用紙に書きなさい。
- ④ 記述問題の字数については、すべて句読点をふくみます。

□ ① 次の各設問に答えなさい。

(1) 次の各文の——部の読みをひらがなで書きなさい。

① 額の汗あせをタオルでぬぐう。

② 彼女かのじょが黙だまっているのには訳わけがありそうだ。

③ エネルギー問題から新しい問題が派生はいせいする。

④ 出発前に点呼てんこを取る。

⑤ 技術の革新しんげんが進む。

(2) 次の各文の——部のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、⑤・⑥は漢字一字と送り仮名(ひらがな)に直しなさい。

① 試合終了しあうりょう後も観客くわんかくの「コウブン」は続いた。

② 水害すいがいに備えて堤防ていぼうをホキヨウする。

③ 大勢おほせいの前で発言はつげんするとはドキヨウがある。

④ 音楽室おんがくしつでガッソウの練習れんしゅうをする。

⑤ 問題もんだいの解決かいけつにツトメル。

⑥ 区役所くやくしょにツトメル。

(3) 次の各文と最も関連が深い言葉を下のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。(同じものを二度使うことはできません)

① たくさんの客がひっきりなしに店を訪れ、対応に追われる。

② 華やかなドレスに身を包んだ女性が登場し、思わず見とれた。

③ 床ゆかに落おちとしてしまったコンタクトレンズを必死ひっしに探す。

④ 彼女は事情を少し聞いただけで、あつという間に原因を言い当てた。

⑤ 様々な立場の人と話し合ったことで、自分のせまい考えに気づかされた。

ア 目が回る

イ 目からうるこが落ちる

ウ 目から鼻へ抜ける

エ 目を奪うばわれる

オ 目を皿ひらのようにする

(4) 次の ( ① ) ( ② ) ( ③ ) ( ④ ) ( ⑤ ) に最もふさわしい言葉を後のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。(同じものを二度使うことはできません)

明日の練習試合について連絡れんらくします。明日の日中も強い日差しが予想されます。( ① )、荷物に水筒すいとう( ② )、帽子ぼうしの二つを入れるのを忘れないでください。水筒すいとうの中身は、麦茶( ③ )、スポーツドリンクがよいでしょう。万一、雨天の場合も練習を行います。( ④ )、雷かみなりが鳴った場合は中止します。( ⑤ )、昨日の試合をテレビで見ましたか。選手の動きを大いに参考にしましょう。

ア あるいは イ および ウ ただし エ ですから オ ところで

(5) 次の〈書き出しの文〉と〈結びの文〉との間にあるア～エの文を、意味が通るように並べかえたとき、適当な順になるものはどれですか。後の1～4から選び、番号で答えなさい。

〈書き出しの文〉案内記が詳密※しょうみつで正確であればあるほど、これに対する信頼しんらいの念が厚ければ厚いほど、われわれは安心して岐路※きろに迷うことなしに最少限の時間と労力を費つひやして安全に目的地とちぢやくに到着することができると。

※詳密…細かいところまでくわしいこと。 ※岐路…分かれ道。

ア そういう損失をなるべく少なくするには、やはりいろいろの人の選んだいろいろの案内記をひろく参照するといふ。

イ しかしそれと同時にその案内記に記してない横道かくに隠れた貴重なものを見のがしてしまう機会きかいははなはだ多いに相違さういない。ウ ただ困るのは、すでに在る案内記の内容をそのままにいいかげんに継ぎ合わせてこしらえたような案内記の多い事である。

エ これに増すありがたい事は無い。

〈結びの文〉これに反して、むしろ間違まちがいだらけの案内記でも、それが多少でも著者の体験を材料にしたものである場合には、存外※何かの参考になる事が多い。

※存外…思いのほか。

1 イ↓ウ↓ア↓エ 2 ウ↓ア↓エ↓イ 3 エ↓イ↓ア↓ウ 4 エ↓ウ↓ア↓イ

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

A それにしても不思議だ。ぼくたちの社会では、ひっきりなしに新しい電化機器やハイテク製品があらわれてもつと便利な生活を約束する。そしてぼくたち消費者はそれら新製品の登場を喜んで迎え、せっせとはたいてお金をかせいで次から次へと手に入れる。ハイテクとは、ハイテクノロジー、つまり、高度な技術という意味だ。「技術革新」を合言葉にぼくたちの社会はますます高度な技術を求めて、つき進んできた。テクノロジーはつねに、時間を節約することをめざす。時間を節約すれば、その浮いた分の時間をぼくたちはもつと楽しくて有意義なことにするために使える、というわけだ。さて、時間の節約のためのさまざまな機器で自分の家や仕事をいっぱいにしてきたぼくたちは、それだけ多くの時間を節約して自分のもののできるはずだった。だが実際にはどうだろう。このぼくたちの忙しさはいつたいたいどうしたわけだ？ 節約した時間で「①」になるどころか、ますます「②」になっていくではないか。

二十世紀を代表するテクノロジーといえば自動車。今ではもう誰も自動車のない世界なんか想像することもできない。こんなに便利ですてきなものはほかにない、ときも思っているんじゃないかな。今も世界中で毎年四千万台の新車が生産されている。アメリカや日本の企業は、巨大な広告費を使って自動車を売りまくっている。その自動車が世界中に深刻な問題を引き起こしていることをきみは考えたことがあるだろうか。道路上の交通事故による死者は、世界で一年に八十八万五千人。自動車などが引き起こす大気汚染による病気で死ぬ人の数は、一年に三百万人に及ぶと言われる。自動車が走るためには、道路が必要だ。その道路をつくるためには、多くの資源が必要だし、周辺の環境も壊される。自動車がはき出すガスによる大気汚染や、地球温暖化への影響も大きい。そして自動車を走らせるためには大量の石油が必要で、それを安い値段で手に入れるために国や企業が競い合い、そのために競争さえ起こしてきた。これらは、すべて「③「便利ですてき」に見える自動車というテクノロジーの舞台の裏にかくされている費用だ。ぼくたちの時間の節約のためのこの気の遠くなるような費用を、いつたいたい誰が払うことになるのだろう。それを考えると、もうあの機械に「自動車」なんていう名前はもつたいたいと感ぜられる。世界中にこれだけ大きな問題をばらまいておいて、「自ら動く車」だなんて！

でもまあ今は、これらすべての問題を横に置いておいて、④自動車<sup>④</sup>が省いてくれたはずの時間がどこに行ってしまうのか、という点にしぼって考えてみよう。Aさんが車を買う。これで通勤や、子どもの送り迎えや、買い物<sup>か</sup>がずっと楽になる。つまり、これらの用事がもつと速く（より短い時間で）、簡単に（より少ない労力で）できる、とAさんは考えたはずだ。しかし彼はそこでホツとして、車が節約してくれた時間を余暇<sup>※よか</sup>として<sup>※ひんげん</sup>のんびり過ごすだろうか。たぶん違う。せっかく車という便利なものがあるのだから、とせっせといるるな所に、もつと頻繁<sup>※ひんげん</sup>に出かけるようになるだろう。今まで行けなかったような遠くて不便な場所へも出かけていこう、と。つまり、車をもつことでAさんが手にいれたはずの時間は、その車でより多くの距離<sup>きょり</sup>を走るために使われるだろう。時がたつにつれて、距離<sup>きょり</sup>というものについてのAさんの感じ方は大きく変わっていき、以前にはとても遠く感じられた場所がもう遠くない。しかし逆に、以前は平気で歩いていたような場所が、あまりに遠くて車でなければ行けないように感じられたりもする。これじゃあいくら道路を作っても、混雑<sup>こんさつ</sup>がなくならないわけだ。

自動車だけではない。新しいテクノロジーによって節約された時間は、もつと多くの距離<sup>きょり</sup>を走り、もつと多くの場所に行き、もつと多くの人と会い、もつと多くの情報を得て、もつと多くのビジネスチャンスをつかみ、もつとお金をかせぐために使われるだろう。実際、人間が移動するのに使われる飛行機、車、船などの交通手段のうち、六〇％はビジネス、つまり個人的な理由ではなく商売や仕事のために使われているのだ。

節約した時間を使って働きかせいだお金で、もつと時間を節約するためのハイテク機器を買うこともできる。実際、インターネットや電子メールや携帯電話<sup>けいたいでんわ</sup>によって移動する情報の量とスピードは、ひと昔前にはとても想像できなかったほどだ。しかもそのスピードはどんどん増していくばかり。こうした新しいテクノロジーのおかげでぼくたちがすごい量の時間を節約できたことはまぢがない。ところがその反面、インターネットの登場によってぼくたちの生活が前より忙<sup>いそ</sup>しくなり、その忙<sup>いそ</sup>しさは放<sup>はな</sup>っておけばますますひどくなるばかりだというものもたしかなことだ。

では後もどすりすればよさそうなものだが、もう社会全体が今のスピードを基準にして動いている以上、そこからひとりだけぬけ出すことはむずかしい。後もどりどころか、そこにじつとどまっていることさえむずかしい。それに、ひと昔前に想像できなかったスピードに慣れてしまうと、こんどはひと昔前のスピードがどんなものだったかがなかなか思い出せなくなるものだ。つまり、インターネットも電子メールも携帯電話<sup>けいたいでんわ</sup>もなかったひと昔前の自分たちが、どうやってそれなりにくらしていたかということが、

わからなくなってくる。ぼくたちは⑤スピードに酔っているにちがいない。もう、自分がどこからやってきてどこへと向かっているのか、がわからない。

ドイツに昔から伝わる「魔法使いの弟子」というお話がある。魔法使いの弟子になったフンボルトはある時、先生の留守中に覚えてた魔法を使ってほうきにそうじや水くみをさせようとする。自分でやるのがめんどうくさかったのだ。働きはじめたほうきはせつせと井戸から水をくみ上げる。そこで、はたとフンボルトは気がついた。かけた魔法をどうやってとくのかをまだ習っていないかったのだ。ほうきがくみ上げ続ける水で家は洪水になってしまう。

Bテクノロジーというのは魔法のようなものだ。ただ、昔の技術はとても長い時間をかけて生み出された。何十年、何百年、時には何千年という時間をかけて。試行錯誤ということばをきみは知っている？ いろいろ試してみても、失敗をくり返しながら、問題を直して、だんだん解決に近づいていくやり方のことだ。昔の技術はそうやってゆっくり進歩した。しかし、そのペースが二百年ほど前から急激に加速する。ペースが速ければ速いほど、科学技術は魔術に似てくる。今ではもう、試行錯誤なんてのんびりしたことをいってられない。どうやってとくのかわからない魔法をどんどんかけるようなものだ。変化のペースが速すぎて、どこでだれがどんな新技術を發明しているかももう誰にもわからない。

現在世界中で、毎週、わかっているものだけで三千種類の新しい化学物質が人工的につくり出されているそうさ。⑥そのひとつひとつが安全かどうか調べる必要があるのだが、いちいち一年も二年もかけて安全性を調べているわけにはいかないというので、調べずにごんごん新しい化学物質をつくる。というわけで、あつという間にあのフンボルトが引き起こした洪水みたいに、世界中が化学物質の洪水になってしまう。しかしフンボルトの場合とちがうのは、これがたとえ話ではないということ。事実、ぼくたちの地球はありとあらゆる汚染物質の洪水だ。

時間泥棒の正体は？ その答えはどうかやら、テクノロジーという魔法の中にかくされているらしい。その魔法をあやつるのは、ほかでもない、ぼくたち人間自身だ。しかしそのぼくたちはみんな、魔法を習いたての「魔法使いの弟子」。魔法をかけることはできて、それをどうやって止めるか知っている者はほとんどいない。

※注 余暇…ひま。 頻繁…たびたび行われること。

(辻真一『「ゆっくり」でいいんだよ』による)

問一 本文中の「①」・「②」には次のア・イのどちらが入りますか。それぞれ記号で答えなさい。

ア 時間もち イ 時間貧乏びんぼう

問二 ——— ③ 「『便利ですてき』」について、筆者が「便利ですてき」という言葉にかぎかつこをつけているのはなぜですか。説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 自動車は便利ですてきなものだという考えは筆者自身のものではなく、自動車の宣伝文句であることを示すため。

イ 自動車は多くの資源を必要とするが、現代社会には必要不可欠な便利ですてきな存在であることを読者に納得させるため。

ウ 自動車を見慣れている読者に、二十世紀のテクノロジーを代表する便利ですてきな存在であることを思い出させるため。

エ 自動車を便利ですてきなものと捉える一般的な感覚に疑問を投げかけ、あらためて読者に考え直してもらうため。

問三 ——— ④ 「自動車が省いてくれたはずの時間がどこに行ってしまうのか」とありますが、自動車が省いた時間は何をするために使われるのですか。「ため。」に続くように、本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問四 ——— ⑤ 「スピードに酔よっている」とはどのような状態を指しますか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア スピードに心を奪うばわれて冷静な判断ができなくなっている状態。

イ 今のスピードに慣れようとして必死に努力している状態。

ウ スピードの力を借りて日常から抜け出そうとしている状態。

エ スピードにふり回されて気分が悪くなってしまう状態。

問五 —— ⑥ 「そのひとつひとつが安全かどうか調べずにどんどん新しい化学物質をつくる」という状態と最も関連の深い言葉を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 口車に乗る    イ 火の車    ウ 大車輪    エ 見切り発車

問六 —— A 「それにしても不思議だ」について、次の各設問に答えなさい。

(1) 筆者はどのようなことを「不思議だ」と考えていますか。次の文の空欄にふさわしい語を字数の指示に従って本文中から抜き出して答えなさい。

・ 1 (二字) な生活を約束し、時間の 2 (二字) に役立つはずの技術が、ますます私たちを 3 (三字) させていること。

(2) 筆者は、テクノロジが招いている「不思議」な現象をどのようなものと捉えていますか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 意外な結果    イ 当然の結果    ウ 皮肉な結果    エ 愉快な結果

問七 —— B 「テクノロジーというのは魔法のようなものだ」に関する発言として、内容の理解に誤りがあるものをア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は速く多くの仕事を終わらせることができる魔法のようなテクノロジーに、大きな魅力を感じるのですね。

イ 人間の理解が追いつかない速さで開発が進むと、テクノロジーは魔法と同じく得体が知れないものになるのですね。

ウ 人間が安易にテクノロジーを使うと、止め方を知らない魔法を使ったときと同様に悲劇を招くこともありますね。

エ 人間は将来テクノロジーをコントロールできるようになるので、生活は魔法にかかったように豊かになりますね。